

所属	言語文化研究科 日本語・日本語教育専攻 修士課程	修了年度	平成 27 年度
氏名	陳 金	指導教員 (主査)	岩下 均

論文題目	日本の猫文化の考察—日中の猫形象の比較を中心として—
------	----------------------------

本文概要

日中両国の「猫」に対する感情の受け止め方を、文化論的に比較検討し、そこから異文化理解のあり方を考察したいと考えたものである。なお、ここでの「形象」とは、いわゆる「イメージ」の意味であり、実際の「フォーム」「シェイプ」の意ではない。

先行研究を概観すると、日本の猫の研究では、猫の生態習性、家猫の起源、猫の伝説、文芸作品に登場する猫などである。総じて日本国民は「猫好き」である点は共通している。しかしながら、もう一步進めて、「では、なぜ日本人は猫好きなのか」という点については、あまり説明されてこなかったように思われる。一方、中国の猫の研究では、同様に、少なからず文芸作品や言語分野での猫の形象が見られるが、おおかたは、猫に「奸臣小人」の名を被せ、馬鹿にしたような形象が強いように思われる。

両国の猫の受容史を、説話文学・物語・随筆・小説など、たとえば夏目漱石(1905)『吾輩は猫である』や、魯迅(1979)『朝花夕拾』・老舍(1932)『猫城記』などの文献から、あるいは、伝説・昔話などの民間伝承から民俗学の研究成果を踏まえながら精査した結果、日本の猫は、平安時代から鎌倉、室町、江戸時代にかけて、人間には計り知れない「神聖な靈力を秘めたもの」であり「神仏の世界にも通じる不可思議な力を持つもの」として受容されてきた。それは、聖なるもの(例えば「招き猫」)であるとともに、また魔性のもの(化け猫)でもあるという形象と受け取られていたことは、いくらでもその証拠を見出すことができるであろう。たとえば、『日本俗信辞典』(1982)には「猫が顔を撫でると天気が悪くなる(埼玉)」「猫がしきりに外に出たがると地震の恐れ(広島)」「猫が死人の上を飛び越えると死人が起き上がる(長野)」「古猫はネコマタという妖怪になる(香川)」などの民俗が、かつて見られたことを記録している。

一方、中国では、日常の猫の行動を見てのことであろう。そこから、ずる賢い人間や、小馬鹿にされる人間にたとえられ、さらに方言として、猫の行動から「避ける」「隠れる」の動詞としても「猫」が使用されている。しかし、この点、日本における用例を見出すことはできなかったというのは、大きな両国民の猫形象差であろう。

科学的な見方が広まった近代から現代であるが、日本人の場合は、今日の日本アニメ文化でも、猫の「妖怪ウオッチ」が子供たちから親しみを持って受け入れられており、さらに、大人にも、社会風俗化した「猫カフェ」、「猫駅長」による地方の経済効果、「猫まつり」など、いまだに猫が話題となって愛され続けている。それらは、日本人がいかに「猫」と親密だったかという歴史を示すものであり、猫と親しい関係の反映が、中国にも「猫カフェ」を誕生させるなど、日本文化の発信源にもなっているという事実にも辿り着いた。そこで筆者は、これを「日本の猫文化」と命名したいと考えたのである。

アンケート調査によって、あらためて日本人の性格や、日本の生活環境にも気づく点も多く、今後の課題として、さらに「猫文化論」を発展させ、考察したいと考えている。